

## 事実的生とルイナンツ（その二）

寺 邑 昭 信

### はじめに

著者は先に『事実的生とルイナンツ（その一）』において、ハイデガー全集第61巻『アリストテレスへの現象学的解釈』（1921/22年冬学期）におけるハイデガーの事実的生の基本カテゴリーの規定について部分的な考察を行なったが、この全集第61巻と同じ表題を持つ（ただし副題は異なる）1922年秋成立と推定されるハイデガーの草稿が、1989年の『ディルタイ年報』第六号において発表され、またその邦訳も『思想』813号（1992年3月号）に「新発見未発表草稿」（高田珠樹氏訳）と題して掲載されている。

この新発見草稿の前半は、狙いとするアリストテレス解釈を行なうに当たっての解釈の視座、アリストテレス攻略のための陣地固め、存在、事実的生についてハイデガー自身の言わば先入見を述べた序論的な「解釈学的状況の提示」を行なっている。これは全集61巻の内容が、アリストテレス解釈に先立つ「現象学的研究の序論」とされているのに対応している。また新発見草稿の後半では、なぜアリストテレス哲学が主題となるのかの理由づけも含めて全集61巻では展開されなかった、アリストテレス哲学の具体的解釈の素描が（『ニコマコス倫理学』第六巻、『形而上学』第一巻、第一章、第二章、『自然学』第一巻、第二巻、第三巻の第一章から第三章）与えられている点でも、当時のハイデガーの思索の歩み、諸術語の確定の理解にとり重要な文献といえよう。（この後半部については深入りは避けるが、アリストテレス哲学の理解に乏しい筆者は、ハイデガーがアリストテレスの存在理解からヒントを得て独自の生の動性の概念を形成したというより、生の哲学的立場から育まれた彼独自の生の概念を解釈の視座として、いささか強引にアリストテレスを捉え返そうとしているような印象をもつ。）

全集61巻と同様序論的役割をもつ前半部分「解釈学的状況の提示」は、やはり事実的生の動性を哲学的探求の対象に据え、その基本的構造をスケッチし

ているのだが、全集61巻の講義よりも時間的に後で成立したと思われるせいか、またもちろん紙幅の関係でもあろうが、その内容はより簡潔にまとまっており、『存在と時間』での現存在理解により近い形を取っている。

とはいえ、本論での課題は、この新発見草稿でのハイデガーの事實的生の論述の考察ではなく、先に発表した『事實的生とルイナンツ（その一）』が検討した部分に続く、全集61巻の後半部分で述べられている動性の根本特色とされるルイナンツを中心に、そのルイナンツ概念についての読解作業にあり、一種の読書ノートのような性格のものにとどまるものである。ルイナンツを中心とする事實的な生の動性の特色づけは、様々な新語も使用されかなり詳しく扱われているのだが（少なくとも筆者にはいまだに）難解な箇所が多く、どこまで理解できたか、まことに心許ないのであるが、新発見草稿の前半部分などを手がかりとしつつ、とにかくもその特色を浮き彫りにしてゆこうと思う。ただし、筆者の非力ゆえの不明箇所があること、また紙幅の都合もあることを理由に、遺憾ながら結論を急がず一部の検討は別の機会に譲ることとする。

すでに先に『事實的生とルイナンツ（その一）』で見た全集61巻前半部分では、哲学的探求の主題は人間の事實的な生であり、哲学の仕事はその存在の諸構造（在り方）の解釈であり自得 *Aneignung* であるという位置づけのもとに、生の基本カテゴリーの分析が形式的告知（『思想』邦訳では提示）という形で進められていた。そこではまず生の基本意味がゾルゲンと術語づけられていた。このゾルゲンは構造的に窮乏 *Darbung* という根本的在り方をもつがゆえに、その都度の世界に関わってゆかざるをえないこと、世界の中の諸対象は有意義性において出会われること、さらにこのゾルゲンは、世界へと気散じする傾向、隔たりの抹消、おのれの存在の遮断、容易なものへの逃避といった関係意味をもつ動的なカテゴリー構造としてあることが示され、そこからさらにそうした動きを可能としている事實的生の動性の解釈が次の課題とされていたのだった。そこでこの課題がどのようになされるのかを、講義の展開に即して見ることにしよう。

なお、全集61巻からの引用は頁数で、『存在と時間』、『現象学の根本諸問題』、『時間概念の歴史のためのプロレゴメナ』からの引用は、それぞれ SZ, GP, PZB の略号に頁数を付して、また新発見草稿からの引用は（原文が手元にないため邦訳を参照することとして）『思想』に頁数を付して示すこととする。

## 1. レルツエンツとプラエストルクチオン

全集第61巻第三章、「E. 動きの諸カテゴリー—レルツエンツとプラエスト

ルクチオン」は先に明らかにされた事實的生の関わってゆく在り方、つまり関係意味の三つのカテゴリー（傾向、間隔抹消、閉鎖）の動き自体をより根源的に見えるようにし、さらに生の本来の動性を形づくっている基本的意味、そこから「生が存在意味に応じてかくかくと規定可能になるような」（117）基本的意味の取り出しをめざしているが、この基本的意味はまた二つの特殊な動きのカテゴリーに意味を与え、その動きの諸構造を支配しているようなものであるともいわれている。

ハイデガーによれば、そうした二つの特殊な動きのカテゴリーは共属的で密接な関連をもつものであるが、それらの一つはまず術語的にレルツエンツと、また他方はプラエストルクチオンと命名されている。このうちレルツエンツという表現は、前稿でも触れたように『存在と時間』にも登場するのだが、しかしそれはたった一度だけ、副詞的表現で痕跡的に用いられているにすぎない。『存在と時間』の「すなわち、現存在は、現存在がその内で存在しているおのれの世界で頹落し、反射的 *reluzent* にこの世界のほうからおのれを解釈する傾向をもっているばかりでなく…」(SZ. S. 21) を参照のこと。またプラエストルクチオンの方は、もはや『存在と時間』には言葉としては登場しない表現である。したがってまず、これら二つの術語は、この講義の時期の事實的生の動性の規定に特徴的なハイデガーの用語であるといえる。

ではこれらの用語はどのような動きのカテゴリーを示しているというのだろうか。ハイデガーは、これまで取り出された生の関係意味の諸カテゴリーを順次再考察することによって、レルツエンツとプラエストルクチオンを解釈し出そうとする。またこの動きの解釈は同時に生の関わる世界の存在のカテゴリー的規定を可能にするものであるという。

生の関係意味の基本意味はゾルゲンであったが、そのゾルゲンの諸カテゴリーの解釈において、最初に明らかにされたのは生がそれ自身の中に「特有の重さ」（119）をもつことであり、そのゆえの動き、世界へと気散じする動きは**傾向**と呼ばれていた。「生、それはゾルゲンという動きでおのれの世界へとおのれを引き渡し、おのれを世界付着的におのれの世界の姿と存在意味においておのれに差し出すのである。」(119)ハイデガーはまず、この傾向というカテゴリーに即してレルツエンツとプラエンストルクチオンの特色づけを行なうのである。

傾向という動きは、事實的な生が取ったり取らなかったりできるような在り方ではない。傾向という動きにおいて、生はただ何かを眺めるのでもないし、ただ何かに魅せられておのれを離れて行くのではない。「傾向はそのようにして帰ってくる、つまりゾルゲンしている生にそのようにして向かってくる」

(119)のである。言い換えれば「傾向は、おのれ自身へと向かって動くところの何かとして、おのれを示す。」(119)つまり生の傾向の動きは、あたかもカメレオンのごとくおのれに出会う対象の存在性格、仮面を言わば身に帯びておのれに出会っているのである。『存在と時間』には、上に指摘した箇所先立って「現存在がおのれに属する存在様式に応じて持っているのは、むしろ、おのれが本質上不断に差当ってそれへと態度をとっているところの、まさにその存在者のほうから、つまり「世界」のほうから、自己固有の存在を了解しているという傾向である」(SZ. S. 15)という表現がある。

ハイデガーは、この講義でも光の比喩を用いて次のように述べる。「この関係の中でゾルゲンとして動きつつ、生は自分自身の方へと照り返すのであり、また彼のその都度の最も近いゾルゲンの諸連関に対して周囲の照明を形成する。」(119)そしてこのように特色づけられる「おのれ自身への出会い性格的な方向における生の動き」(119)が **Reluzenz** と名づけられるのである。仮にこの言葉を**返照**と訳しておこう。(『存在と時間』では光の比喩は主として現存在の現の開示性を表わす役割をもつこととなるが、それでもその序論では、「世界了解内容の存在論的反射 Rückstrahlung」(SZ. S. 16)という表現も使われている。)

メルカーの指摘するように(B. Merker, Konversion statt Reflexion. in Martin Heidegger: Innen-und Außenansichten, Frankfurt a. M. 1989 S. 217), こうした現存在の存在が頹落の対象から自己の存在を理解する在り方の光の比喩による表現は、1928年の講義『現象学の根本諸問題』にも再び登場する。その中では、自分へと振り向くという意味、理論的立場の反省 Reflexion は、派生的なものであるが、この表現を「何かに当たって屈折し、そこから反射する、つまり何かの方から反射光の中でおのれを示すこと」(GP. S. 226)という光学的な意義で解するなら、事実的な現存在の中で自分に露開されている仕方と呼ぶのに適切であるといわれている。またさらにそれに続くパラグラフ「現存在は、第一にそして不断に事物の中に自分を見いだすのであり…各人は、彼が従事し配慮しているところのものである。日常ひとは自分と自分の実存を、ひとが従事し配慮しているものから理解している。…世界そのものへの直接的で熱中した引き渡しの中で現存在の自分自身が事物の方から照り返す widerscheinen」(GP. S. 226f)や「事物からの非本来的な自己の照り返し」(GP. S. 229)等にも、レルツエンツ概念の余韻がうかがえるであろう。なおこうした意味の反省概念については、『四つのゼミナール』(S. 45)も参照のこと。

いずれにしても、返照という在り方は、生が自分自身を見据えているのではなく、いわばおのれの放った光の世界からの歪曲された反射光の中で自分を理

解してゆく様を指すものにとりあえず理解してかまわないであろう。

それでは傾向におけるプラエストルクチオンの方はどのような事態を表しているのだろうか。生は、世界からただ照り返しを受けているだけなのではないし、全く盲目的に世界に向かっているのでもない。光源はそもそもおのれ自身にあったのである。「生は、この世界からそしてこの世界のために予め立てる *vorbauen*。生はおのれの先取りと自得された予持という意味で準備を整えるのである *sich einrichten*。生は予持でもって自分を確保し、それを明確に或いは不明確に顧慮しながら自分をゾルゲンするのである。」(119f.) つまり「ゾルゲンする生はいつでも予め立てており、生はおのれの返照にありながら同時にプラエストルクティブ」(120)なのである。

このプラエストルクチオンは、子持（哲学的探求における予持については新発見草稿では「主題的な対象分野を、その事象内実の現実的な根本性格の如何に関して見据えること」(『思想』35頁)と規定されているが、その予持)の「確保、保護、新たな獲得と手放し」(120)を行なうという。(この確保については新発見草稿の次の箇所も参照のこと。ゾルゲンの「関わり合いの中で活躍し、これを時熟させるひとつの要因としてこの関わり合いを牽引しているのが目配り (Umsicht) である。気遣うとは自分の回りに目を配ることであり、目配りをするものであるかぎりにおいて同時にこの目配りを養おう、関わり合う対象との親しさを維持保全し増大させようと気を遣っている。」(『思想』10頁)この箇所ではプラエストルクチオンの一つの在り方が示唆されているといえよう。)

ここまでの説明だけでは、この概念でどのような事態が意味されているのか、必ずしも明確ではないが、光の比喩で表すなら、生がおのれのゾルゲンの対象を確保するために世界へと予め向けている生自身からの光の照射の作用にあたえるといえよう。(気散じの両義性についての次の指摘も参照。「気散じ：1. おのれを気散じさせること (プラエストルクティブ), 2. 気散じしているもの (レルツェント)」(119)。なお気散じ *Zerstreuung* というパスカル的響きをもつ言葉には、「気晴らし」という意味の他に、光の「分散」「拡散」という意味もあり、この言葉も光の比喩から採用されているように思われる。)ともあれ、ここではプラエストルクチオンは、**先形成**と訳しておくことにする。

この先形成は、単に世界の中の個々の対象への関わりに限定されていない。ハイデガーはそれが明確に把握され、共同社会的に組織化された場合には、文化財の制作仕上げにおけるゾルゲンしつつある生としてありうるという。そのような生が「ゾルゲンする生の、世界的なレルツェンツのプラエストルクティブに組織された傾向性としての文化生活」(120)であるというのである。

またこの先形成のもつ確保 *Sicherung* という傾向は、積極的に創造的な成果という在り方に返照的に高められる場合にはそのものとしては失われることがあり、またそれとともに「事実的な生の中で響いている」(120)不確かさに生の様式で出会う可能性も失われうるという。(こうした点には「生の動性の基本的特質、つまりルイナンツ、硬化が表現されている」(120)というのであるが、これは、『存在と時間』の中の「すべての根源的なものは、一夜のうちに平滑にされて、とっくに熟知のものになってしまっている。すべての戦いとられたものは手ごろなものになる…」(SZ. S. 127)に対応する事態であろうか。)そこから生自体を客観的現実と見なす哲学的解釈、それはギリシャ人にさかのぼるものとされるが、そうした哲学的解釈まではほんの一步であるという。

ハイデガーは、生の関係意味の基本カテゴリーが一まとまりの動きとして特有の分離不可能性、相互連動性を有することの理由を、そのカテゴリーの各々が返照的かつ先形成的に特色づけられていることに見る。そこで次に見取るべきことは、「動性自身が返照と先形成の在り方で働くこと」(121)である。この後に続けてまた「[ルイナンツ—事実的な生の固有の転落性格]」(121)というメモの形でルイナンツという言葉が登場している。

次に**間隔抹消**のカテゴリーにおける動きは、どのように解釈されるのだろうか。生の関係意味の中には表明的に「前に」を自得する可能性、そうした決定的な予持の中で生を遂行する可能性である間隔性が含まれていたが、この可能性は有意義なものへの没頭の中でおのれを維持できなかった。(103参照)しかしこの可能性は間隔抹消によって無に帰すのではなく、再び自分にもどって来る。とはいえ、それはもはやそれ自身で間隔維持的になのではなく、「返照的に、それはおのれ自身に世界的付着的な間隔性の姿で向かって来て、そのような形でゾルゲに身を置くのである。」(121)こうしたゾルゲンは成功、地位、利益など誇張的なものを目指すのだが、この誇張的なものが、実は先形成的な動性の表現なのである。「ゾルゲンは間隔性と間隔追求の誇張的養成において積極的自主的に先形成的である。」(121f.)

このような間隔抹消の動き、世界付着的返照の中での先形成の動きは、学問の「第一に世界的に領域付着的に内在的な客観的生成」(122)の起源となりうるという。(しかしまたこの先形成は実存在的な自得の可能性へと先形成されることもありうるのである。)この箇所については、ゾルゲンの関わり合いを導く目配り *Umsicht* が、単なる注視へと変容し、世界をもっばら見相から見るようになり、そこから学問が組織されるという新発見草稿の記述が参考になろう。(『思想』10頁以下)。先形成はそうした目配りという在り方もとっているであろう。

その場合、理論的態度の「前に」は、客観性という最高価値、学問性、自由な知的誠実さと事象性、権利を証明する理論理性の法廷として返照的に生へと戻ってくるのである。ハイデガーは、非合理的なもの、反知性主義、反学問も、こうした理論的理性の境界標示のめぐみによって成り立つ同類と位置づけるのである。

次に第三の関係意味である閉鎖の場合はどうであろうか。「何かに向かって」が支配的な「傾向」の場合は、先形成が動きにおいて優位を占めたのに対して、閉鎖において動性規定に優位に働くのは返照である。というのも閉鎖においては「出会われている、現われつつ自分を告げている生から離れること」(123)だけが問題であり、先形成は関心の的にならないために「閉鎖そのものは先形成的には未規定なのである。」(123)この閉鎖の「から離れて」、おのれ自身に逆らって」(123)の動きにおいて「事実態とその動性の基本意味がもっとも鋭く表現されている」(123)のだが、その時熟の性格は特別な仕方で覆い隠されているという。

閉鎖という性格のゾルゲンは「独特に連れ去り駆り立てるという仕方では返照的にある。」(123)生は世界の中に没頭して自分自身から目をそらせるようにしているが、しかしそれによって生は特別の動性においておのれ自身へと到来するのである。つまり「自分へと向かい行くことにおいていわば自分を払い除ける」(123)というようにである。

ハイデガーによれば、こうした返照は、関係ということの事実態のカテゴリー的構造にとり重要な基本意味を示しているのである。つまり、それは「おのれ—から—出て」において「おのれ—から—離れて」ということをである。こうした閉鎖における返照ゆえに、生はゾルゲンしつつおのれ自身から離れてにおいておのれ自身に逆らってという在り方を形成し、おのれから離れておのれを整えることになるのである。

閉鎖における先形成は、こうした生の動性、自分自身からの逃避という在り方から意味方向を受け取るのであり、世界や自分自身と交渉する様々な仕方を獲得するのである。(ラテン語の *praestrue* は、準備するという意味とともに「塞ぐ、邪魔をする」という意味ももっている。)かくして「そうした返照に導かれる *Vorbauen* の仕方、つまり予持の取り出しと取り上げとは、それが事実的生自身を「本当に *eigentlich*」(実存カテゴリーとしての「本来的」)については、事実態を参照せよ) 捉え損なうこと、捉え損ないうことを目指すのである。」(124)この自己を捉え損なう可能性を生はゾルゲンへと取り上げ、「閉鎖傾向の中で押し寄せる生をゾルゲンしつつ直視しなければならないという厄介な状態にならないよう」(124)絶えず「機会」がつかないように心がける。こ

のような時熟の中で閉鎖にとり特色的な返照に相対的な特殊な先形成の在り方が、世界付着的可能性の多様さ、無限性に眩惑されて自分自身を省く時熟の仕方、つまり「省略的なもの」(108参照)なのである。

## 2. 返照と先形成の相互関係

こうして、傾向、間隔、閉鎖という関わりつつある生の動きに即して、先形成と返照の動きが解釈し出されたわけであるが、この先形成と返照の動きは、たとえばフッサールの志向性が、その志向対象が何であれ、すべて「何かへとおのれを向けていること」という共通の基本形式をもっていたのと同じように、三つの関係意味に共通の動きの基本的軌跡を指しているといえよう。さらにまた131頁に挿入されたメモには「志向性の表現としての先形成と返照：事実態の(生の存在意味の)形式的原構造」(131)という語句が見られる。もちろんハイデガーは、志向性を単に意識の次元に限定するのではなく、形式的には *sich-richten-auf* と捉え、それを現存在の振る舞いに共通の在り方として存在論化し、後には世界内存在という原的超越の派生形態と位置づけることになるわけであるが(拙稿『「ハイデガーと志向性」についての覚え書」参照)、このメモでの言い回しから、先形成と返照は、意味志向と意味充実の作用の概念、そこでは *intentum* が理解されるだけでなく同時にその存在意味も了解されるのであったが、そうした概念に原型をもつことが推定される。あるいは新発見草稿の「配慮的に気遣うといっても、単に一般的にその根源的な志向性において世界に関わっている、というだけのものではない」(『思想』12頁)や「この志向性とは、事実的な生という存在性格をもつ対象の存在構造にほかならない。志向性を単に何かへの関係という意味に取るなら、それは生の、つまり気遣うという根本動性の現象学的性格のまずは第一に強調されるべき点である」(『思想』17頁)、あるいは時代が下るが『現象学の根本諸問題』の先にあげた反省概念の説明に続く箇所、「事物の方から反照している自己は…事物の「中に」あるのではない。…現存在は事物の許にあるのである。…そのなかで現存在が実存している振る舞いは、志向的に、へと向けられているのである」(GP. S. 229) という箇所も反照あるいは返照と志向性の結びつきを強く示唆するものといえよう。

またハイデガーによれば一つの関係意味の動きに見られる先形成と返照とは、別の関係意味のそれらと無関係に遂行されているのではなく、お互いに連鎖しあってあるいは養分を補給しあって全体として事実的な生の動的性格を作り上げているのである。例えば、閉鎖における先形成、省略的なものは傾向を刺激

する。傾向は対応する気散じの姿を取り、諸々の有意義性を形成するし、それ自身でまた間隔抹消へと返照して誇張的なものへと養分を与えるのであり、また間隔抹消の方でも閉鎖自身に返照して失視の機会を与えるというように。これらの諸関係の中で、生の動性がいかにそのを遂行しているかが、つまり遂行意味が告知されているのである。

こうした解釈の進展によって、動性の諸カテゴリーは複雑になってゆくが、それとともに最初はゾルゲンの遂行というだけで未規定であった動性の意味が一層明瞭で単純となってゆくとハイデガーはいう。傾向、間隔抹消、閉鎖という関係意味のカテゴリーは、遂行の具体化を明らかにしたとはいえ、まだ動性意味の解明にまではいたらなかった。しかし先形成と返照の分節化によって動性意味がもたされたというのである。「ここで生き生きしている動きのどのようにかが、一つの観点で明らかになった。すなわちおのれを動かすという性格、それ自身における動性をもった仕方。」(126)先形成と返照という二つのベクトルからなる形式的構造をもつ事象的な生は、まさに自分で自分を動かしている（ここではハイデガーは強調してはいないとはいえ、また動いてゆかざるをえない）絶えざる変化の運動である。

とはいえこうして取り出された動性の規定はあくまで形式的であり、それ自体として見るならば、空虚であって、事象的生をその動性、事実態において規定するには不十分に見えるかもしれない。ハイデガーによれば、そうした最初の形式的な空虚は、関係意味の連関の中で先形成と返照をたどることによってゾルゲンの遂行が分節化され、具体的になるのである。つまり解釈の中で「迎え受ける、刺激、安心させつつ運動に保つ、元気づけつつ維持する、断続的に（機会に応じて）興奮させること」「先へ延ばしたり裏付けしたり、確実にしたりする勧告…追究すること、機会をうかがうこと、待ち伏せること」「当て損なうこと、当て損ないの可能性を形成すること」(127)といった動性の特有の諸性格、先形成と返照の動性を規定している諸性格が浮かび上がってくるというのである。「それからの動性の諸性格の中で、事象的な生はおのれの世界において自分を確固と生き確固とゾルゲンしているのである。」(127)

そうした関係カテゴリーという在り方において返照的諸可能性および先形成諸可能性は言わば『存在と時間』における「被投された企投」のように動的に一緒になっているのだが、この動的な（事象的な）相互性は「生の事象的なものの基本意味」(128)の表現であり、それは「動性の動き方としての返照が、この動性そのものによって先形成されること、そしてまさにこの動性は、動きに応じて返照的なものとして先形成を形成 *ausbilden* し時熟させるという仕方であること」(128)を表わしているという。この表現はあまりに形式的なもの

といわざるをえないが、ハイデガーは、さらにこの「独特の連関」の概念的告知が、これまでの動性解釈に即した意味のという限定つきの *Bildung, Aus-bildung* という表現を用いてなされうるとし、次のように述べる。「第一にこの連関はある像 *Bild*, 先与されているもの、先保持されているもの、返照しているものに従って何かを時熟させること、遂行することとして理解される。次にその像に依拠しつつ遂行的に何かを形成すること *ausbilden*, 何かを形成物へと至らせることとして理解されるのであり、その際まず第一に重要なのは、形成されるべきものの形態の特色なのではなく、時熟させることそのもの—*struere* 形成スルコトがなのである。」(128) またある像に、つまり先所有されているものに従って時熟するという形成の第一の意味契機は「照明」*Erhellung* ということと理解する諸現象との関連で一層明瞭になるというのだが、ハイデガーは、ここではそれを示唆するにとどめている。(断片5「照明とゾルゲン」(185)および「まさに事実的にルイナントな生の最も固有の照明傾向から生じるところの哲学的に解釈的なこの対象の把握の仕方」(178)参照。)

この先形成と返照の独特の連関が、詳しくはどのようなものであるか、筆者にはこれだけの説明からはよく理解することができない。ここではその構造連関の分析はひとまずあきらめることとする。ただし1925年の講義、『時間概念の歴史のためのプロレゴメナ』の中の「ゾルゲと志向性」と題された箇所、ハイデガーの述べていること、「現存在の根本構造としてのゾルゲの現象から明らかになることは、現象学の中で人が志向性でもって理解しているあるいは理解したものが、断片的であり、単に外から見られた現象にすぎないことである。しかし志向性で意味されていること—単に何かへとおのれを向けること—は、むしろさらに既に—の許に—あること—において—おのれに先んじて—あること—という統一的な基本構造へと戻し置かれなければならない」(PZB. S. 420)という発言に重ね合わせて見るならば、先形成しつつおのれへと返照するというこの動きは、既にそうした統一的な基本構造(それは『存在と時間』ではゾルゲの基本構造としてより詳しい規定をえることになるが)を言いあてているといえよう。また志向性の構造 *sich-richten-auf* は、『存在と時間』の時期には現存在の了解という実存カテゴリー *sich entwerfen auf die Möglichkeit* あるいは *sich verstehen aus der Möglichkeit* という構造へと深められて定式化されるわけであるが、であるとすれば、フッサールの志向性をより時間的かつダイナミックに存在論化していると思われるこの先形成と返照は『存在と時間』での「企投」、そして「…としての(非本来的)了解」の原型をなすともいえよう。とにかくこの動性の相互関係で明らかにされているのは、先形成なしに返照という動きはありえないが、その先形成、つまり先持を確保する働き、

あるいは光を分散させてゆく働きもしくはその軌跡自体が、返照するものにより予め規定されていること、先形成は無から発するのではなくすでに返照によって言わば汚染されている事態を示唆するものと受け取っておくことにする。つまり先形成自体が、返照するものの像に規定されたものとして返照的なのである。あるいは動性は一つの照明運動であるが、この照明のエネルギーを先形成は、おのれの本来の光源からではなく拡散している返照から汲み取っていると言ってもよいだろう。

いずれにせよこうした動きをとってゾルゲンは、その都度の返照に応じて動いてゆくが、このことは生が没頭できる尽きない可能性として「返照そのものがゾルゲンの中に保たれている」（129）からであるという。事実的な生がおのれの世界の中で公開性をもつこと、世界が事実的出会い性格的に回り世界であることをゾルゲンが気遣っていることがその証拠なのである（「この世界の現存在の仕方が時熟するのは、事実的な生が、配慮的に気遣うという自分の動性の許に滞留するときだけである。」『思想』11頁参照。）

むろんこの「回り」は諸対象間の配置関係ではなく、ゾルゲンする生が生きる世界のカテゴリー規定である。「この生は、返照をゾルゲのうちに所有しながら、何かを自分の回りに所有することを、つまり世界を、生の忙しい活動に対して応答したり、少なくとも聞き耳を立てたり、見物したり、相談したりするような環境であるというように所有することを目指す」（129f.）のである。世界は回り世界としてあるが、それは「返照が事実的に可能である」（130）というようにあることである。言わば光が屈曲する球面（地平）としてあるのである。こうした意味で共同世界も自己世界も回り世界と特色づけることができるのである。

「こうしてゾルゲンの中の返照は、それ自身予め立てること、準備をすることの対象なのである。つまり、先形成によって動きの在り方で襲われているのである。」（130）つまり先形成が対象とするのは、回り世界の方から返照してくる返照的な変様を被った自分自身なわけである。結局この先形成の動き、「あらゆる予め立てることは、返照している諸可能性をおのれに購い、世界的な出会い性格の装いと意味でおのれを時熟させる」（130）ことによって、まさにゾルゲンを、言い換えれば、事実的な生の動性を構成しているのである。つまり「ゾルゲンは、各々の先形成的な動性を何らかの世界的な返照の中で自分に与えようと努めているというように存在する」（130）

この生の動性は「こうした自分のゾルゲンの世界に没頭するおのれを確固と生きること Festleben を事実として（歴史的—現実的に？）生きること、客観的—歴史的に見れば「保持すること」を目指すのである。」（130）この

「保持すること」Erhaltung という言葉は、自己保存 Selbsterhaltung を思わせるものである。生はその有限性、あるいは窮乏 Darbung のゆえに生存を維持し確保するためにはおのれ以外のものに関わらざるをえないわけである。(自己保存と頹落の関係については、B. Merker, Selbsttäuschung und Selbsterkenntnis, 1988 参照。)

この動性のカテゴリー構造の解釈から明らかになったのは「まさに生がおのれ自身から出て外へと生きる aus sich hinausleben」(130)という事實的生の動性のもつ特殊な独自性、固有動性である。これはまさに existieren ということであろう。また後にハイデガーは世界内存在を原的超越と表現することになるのだが(『現象学の根本諸問題』参照)、その嚆矢ともいえる表現がここに見られるともいえよう。いずれにせよ事實的生は、客観を眺めつつ捉える先与されている主観などではなく、おのれから出て何かに関わりつつおのれへと帰ることという動き自体がおのれである在り方であることが明示されたわけである。

確固と生きることを、つまり安定を目指すこの動性は、「動きの中でおのれにおいておのれにおのれ自身を得させようとするような」(130)動性である。この事實的な生の動性が「事實的生自身をなしている」(130)のだが、しかもそれは「事實的生が、世界の中に生きながら、動きを本来的には(!)それ自身ではなさず、むしろ生のどこへ、何へ、何のためにとして世界を生きる」(130)というような在り方をなしているのである。傾向、間隔抹消、とりわけ閉鎖の諸カテゴリーが告げているように。

### 3. ルイナンツ

「このように自分自身を形成してゆくがその場合自分自身の中で自分自身を自分自身に得させようとしながら強まってゆく事實的な生の(そのようなものとして彼の世界によってなされる)動性」(131)、「おのれ自身を形成するが、しかも自分をではなく、それが動いて行く先である空虚を形成する動き」(131)を、ハイデガーは「転落」Sturz と特色づけ、それを「事實的な生の根本意味」をなすものとして術語的に「ルイナンツ Ruinanz (ruina-Sturz)」(131)と定めている。ルイナンツは形式的告知的には「事實的な生の動性であり、事實的な生が、おのれ自身において、おのれ自身として、おのれ自身のために、おのれ自身から出てこれら一切においておのれ自身に反対して gegen 「遂行するような」つまり「存するような」事實的な生の動性」(131)と定義される。

このルイナンツという言葉は『存在と時間』ではもはや登場せず、日常的現

存在の根本様式を表わす頽落 Verfallen という言葉に取って代られることになるものである。（新発見草稿では、「自分自身から脱落し、そうすることで世界へと墮落し、もって自分を崩落させるに至る生の事実的な根本傾向の表現」（『思想』12頁）或いは「事実的な現存在の墮落性向（あるいは簡単に何ものかへ墮落）」（『思想』12頁）と表現されている。また全集第63巻所収の1923年夏学期の講義『存在論（事実態の解釈学）』では事実的生に代って現存在という言葉が登場し、その第二部では『存在と時間』で展開されることとなる日常性の分析の基本講図が展開されているが、頽落に関する現象の記載は、好奇心を中心としているとはいえずかにすぎない。ただその講義の付論の「事実態。ruinant な動性の差し控え、つまりこの困難を真剣に受けとめ、それとともに目覚めた困難の増加を遂行し保持すること」（Bd. 63. S. 109）という語句にルイナンツの痕跡を認めることができよう。先に見た Reluzenz, Praestruktion もそうであったが、この講義に見られるこうしたラテン語語源の用語の術語的使用からは、この時期まだ『存在と時間』に見られる術語が固定していなかったことが読み取れるし、またこうした新奇的な転用は伝統的な哲学との対決、根源的理解を目指す当時のハイデガーの苦心を伝えているようにも思われる。）

それではこの講義の中では、現存在の頽落はルイナンツとしてどのように捉えられているのだろうか。ハイデガーはこのルイナンツの解釈に当てまず現象学的解釈が告知するゾルゲンの反対方向の動性のもつ「(ルイナントな)「反対して」」を取り上げる。「ゾルゲンする没頭は、「おのれ自身に反して」の生の動きであり、それゆえ生は「まだ」別の何かであり、その別の何かはなるほどルイナンツにおいて現にあり、現われるのだが、しかし押しつけられているという仕方であること」(132)は、ただちに明らかとはならない。「生の事実に本来的なものとして(形式的に)何かに反対して Wo-gegen」(133)の適切な理解が可能となるためには、解釈が、「まだ展開されていないその前提」(133)へと繰り返し戻し措かれる必要があること、「事実態における動性が解釈的な自得に達している」(133)必要が指摘される。「どのくらいルイナンツが事実態のカテゴリ-的根本規定性と判定されうるかは、その前提の解釈によって明らかになるにちがいない。」(133)この前提については、ハイデガーは付論でスケッチしてはいるものの(それは推論の前提のようなものではなく、簡単には解釈自身がその一つの在り方でもある「ゲシヒトリッヒ・ヒストリー-ッシュな Voraus-dasein」(付論 S. 159 参照)であるといわれるが)、この講義の中ではそれ以上の詳しい扱いは行なわれないのである。(前提については、SZ. S. 8 も参照。)いずれにせよここでのルイナンツの解釈は、そうした「前提」が明確になる以前の段階のものである点に注意しておく必要があろう。

そこでここでの解釈はそうした前提へと迫るのではなく、これまで得られた成果を「遡及的に追及する」という形で進められる。それは単なる後からの実証といったことではなく、解釈自身が解釈の進行の中で以前の成果を新しい解釈段階の中へ組み入れ立てることとされるが、それによって解釈がより豊かになってゆくわけである。具体的にはルイナンツ自身のより鋭い分節化が、つまり「第一にルイナンツが返照と先形成の動性性格をそれぞれ自身に対してとそれ自身においてまたそれら相互の関係においてどのようにカテゴリー的に規定しているのか」(133)の解明が目指されるのである。

これまでの解釈は、先形成と返照の動性カテゴリーが、運動付着的なものとして理解できることを示しているが、このカテゴリー連関は、「諸カテゴリーは自分たちをお互いに解釈する」(135)ことの別表現であるという。「解釈的な連関および動性連関は事実的本来的に同じものであり(動性、照明の遂行であり、動性の連関における被照明性である)、それはその存在意味が事実態として規定される存在者の様々のカテゴリー的規定の仕方なのである。」(135)

返照は、ゾルゲンすることの中で動きの仕方で見舞われているが、そうしたゾルゲンは、おのれ自身において諸々の動性を生きているゾルゲの中に取り上げるという在り方を取っているのである。つまり「ゾルゲンすることはおのれの遂行のうちで…それ Es 自身を狙っている。」(135)しかし「「それ」自身をであって、必ずしも「おのれ」自身をなのではない。」(135)この「それ」は受け入れられたゾルゲが世界付着的に出会われることの形式的告知である。「ゾルゲンすることはおのれ自身をゾルゲへと取り上げる。ただこの場合注意すべきことは、この「おのれ」は根源的なおのれなのではなく、「それ」によって、「それ」の出会いによって貫かれたものなのである。」(136)つまりゾルゲンは、ゾルゲン自身によって、ゾルゲの中に保たれ「配慮されて」いるのである。

この配慮されていることとしてのゾルゲンを、ハイデガーはベゾルクニス Besorgnis と規定する。(この表現は、『存在と時間』では基本的実存カテゴリーを表すものとしては使用されず、存在的な意味の心配を表すものとして登場するだけである。SZ. S. 192, S. 197 参照。)この言葉は『存在と時間』での配慮的気遣い Besorgen に相当するものと思われるが、ここでも一応配慮と訳しておくことにする。「この配慮の中で、ゾルゲンすることの完全な動性はおのれをおのれ自身へと言わば投げかけるのである。wirft sich auf sich selbst. つまり、おのれ自身の動性が、おのれ自身によって動かされるのである。」(136) (この語句は、動性を表わすためにおのれをへと投げかけるという表現が用いられている点で、『存在と時間』の企投概念のさきがけとして注目され

るが、今はそれについては論じない。) この配慮という動きの中で動性は、いわば自己増幅するわけであり、その動性の形式をハイデガーは動性の「高まり」(136) *Steigerung* と術語づける。

そしてそれ自身が高まってゆく配慮や転落の中で、今や容易に見取ることができるのは、照明や曖昧さ自体が高まっていることであるという。例えば「配慮によって時熟させられた閉鎖において、生は最高の現実性、活動性、真剣さとしての心配の見せかけのもとに、おのれの世界において確固とゾルゲンするが、それによっておのれ自身をおのれ自身においてまたおのれ自身を前にしてもはやよく知らないことになる」(136)のである。かくして「事実的なルイナンツな生は、いわば自分を配慮自体において覆い隠すのである！（ラルヴェンツの転落性格）。」(136)（「本来、各自の生であるはずの事実的な生が、たいていのところ各自の生として生きられないのは、この墮落傾向のためである。」（『思想』13頁）参照。）

● 配慮の中でゾルゲンの世界へ関わることを感動的な課題として日夜努力する生、しかし実はそれは「単に引き込まれること、連れ去られることであり、ただそこではルイナンツに照明が放棄され、ルイナンツそのものに引き渡されているだけなのである。」(137)

● ところで生は、ゾルゲンの遂行においてさしあたり世界的な姿ではあるが現われている。しかしこの特有の動性からなる現われの現象は、客観的な出来事的な発生ではなく、その在り方は独自の時間性格をもったゾルゲンの遂行の仕方そのものである。「…ところで各々の現われの仕方は、その特定の（事実的な）カイロス論的 *kairologisch* な性格（*καίρος*—時間）を有している。」(137)これまでハイデガーは時熟という表現を繰り返し使用してきたが、ここで事実的生の動きの特有な事実的な時間性格、時間連関がカイロス論的なものとして術語化されるのである。周知のようにハイデガーはすでに1920、21年のフライブルクでの講義『宗教現象学入門』において「主の再来」についてのパウロの書簡を解釈して、その突如の再来の時間は、客観化する時間ではなく生の遂行の時間として「カイロス論的時間」であることを述べていたといわれるが、事実的生のゾルゲンの特殊なルイナンツを示すためには、そのカイロス論的な時間性格が考慮されなければならないというのである。「問題はカイロス論的な観点において、配慮の中で生そのものがおのれをどのように告げている（現われている）のか、また告げて（現われて）よいのか、である。」(137)

ここでハイデガーは、こうした配慮的在り方のカイロス論的時間の特色を説明するために、事実的生の出会う「苦しめるもの（苦しめること）、苛むこと、

痛ませること」を取り上げている。それらは「感情」（それは心理学的カテゴリーといわれる）ではなく、事実的な存在の仕方であることを断った上で、ハイデガーはそれらが「特殊な報知意味」（138）をもつという。それは知識を媒介したり志向によって成立するのではなく、事実態における固有の現われであり、事実的生を遂行意味にしたがって特殊な関係意味の方から規定するものであるという。ハイデガーはそれらの動性の性格をここでは未規定のままにして、詳しく取り扱っていないのだが、ここで登場している現象の特殊な報知の機能は、明らかに『存在と時間』での情態性の開示機能と対応していると解してよいであろう。それはこの箇所に入挿されたメモに「[*Mir-sein*]: Horrescenz を参照せよ！」（138）とあることからもうかがえるのである。

ともあれこれ「報知性格は、…事実的生を、それ自身から要求しようとする在り方、（苦しめるものが私にとってあるという在り方）」（138）であり、こうした「苦しめるという仕方で告げられるのは、生を蝕むような何かである。」（138）このような報知意味の出現は、ヒストリーッシュなものであり、それぞれの出会いに構成的であるという。ヒストリーッシュな出来事として、苦しめるものの到来は「「めったに」現われな<sup>い</sup>か、「いつか時折」とか「時々」とか、事実的な生が結局そのため「時間をもはや」もたない」（139）といった様態をもつが、この場合の時間は、順序づけの枠や次元、ゲシヒトリッヒな事件連関の性格なのではなく、「動性を可能にしてその内部で許すだけでなく、動性をともに構成しながら独立的・事実に運動する性格」という意味での、動性の特殊な在り方」（139）の時間であり、この時間は、例の主の突如の再来の時間同様、カイロス論的な時間なのである。挿入されたメモの中でハイデガーは「事実的な生はおのれの時間をもつ。…時間は枠ではない。…時間を持つのではなく、時間に所有されることはゲシヒトリッヒである…」（139）とも述べている。（周知のようにこの時期のハイデガーの用法では、*historisch* と *geschichtlich* の概念は『存在と時間』の場合とは反対の意味づけをされて用いられている場合が多いのである。ヒストリーッシュについては、この講義の110頁以下も参照のこと。）

こうしたカイロス論的な時間性格である「めったにない」とか「時折いつか」は、実はそうしたものの気にならないこと、世界的な保証の表現なのであり、「ますます増大する気がつかれな<sup>さ</sup>のゆえに、…ルイナントの高まりを表現している。」（139）のである。

忙しくルイナントに生きる生は時間がないといわれるが、それは彼の根本動性であるルイナント自身が、「時間」を自分において自分のために奪い去ってゆくからであるという。「ルイナントは時間を奪い去る。つまり事実態から、

ルイナンツはヒストリーリッシュなものを抹消しようとする」(140)のであり、ルイナンツは時間抹消という遂行意味をもつのである。もちろん、ヒストリーリッシュなものはルイナンツにもかかわらず絶えず生の中にあるとはいえ、このようにルイナンツのカイロス論的な諸性格は、ルイナンツの高まりの表現、おのれを、さらにおのれの時間を覆い隠して行く傾向の表現なのである。

結局、配慮的在り方における生、「ルイナントな生は、おのれ自身の中にからめ取られている。…事実的生は—その事実にルイナントな仕方で—自分自身の重さを支えようと欲し、—結局…そのことで気も狂わんばかりになったり愚かになったりするのである。」(140)

以上のように、ハイデガーは、配慮におけるルイナントな生が、おのれ自身を覆い隠すこと、さらにはカイロス論的な時間を抹消しようとしていることを明らかにしたうえで、最後にこれまでの解釈から固定できる「ルイナンツの形式—告知的な四つの性格」として、「1. 誘惑的なもの (Das Tentative), 2. 安らぎを与えるもの (Das Quietive), 3. 疎外するもの (Das Alienative), 4. 無化するもの (Das Negative; 能動的, 他動詞的な)」(140)をあげる。新発見草稿では「墮落傾向は、誘惑する、気休めを与える、疎外するという三つの動きの性格において…」(『思想』13頁)と述べられているように、第四の性格は挙げられていない。またこの性格づけに対応すると考えられる『存在と時間』第38節「頽落と被投性」では、「誘惑、安らぎ、疎外、および補縛という、提示されたこれらの諸現象が、頽落の種別的な存在様式を性格づけるのである」(SZ. S. 178)と規定されており、ここでも第四の性格は「補縛」によって置き換えられている。

ハイデガーは講義の残りの部分で、これらの性格を詳しく取り扱うのではなく、形式的告知について、とりわけその予防的性格について、またルイナンツの向かう先であるという無について（ここではルイナンツの第四の性格、無化するものについて言及がなされるのであるが）さらに反ルイナント的な動きとしての哲学の理解、さらに世界の対象性、事実的生自身が有する疑わしさについて論じるのである。

ルイナンツの全体的理解のためには、とりわけルイナンツの向かう先である無についての解明が重要と思われるが、それがどのような事態であるかについては、筆者は今のところ明確なイメージを有していない。そこで、はじめも述べたように、その最後の部分についての考察は、別の機会に行ないたいと思う。

そのようなわけで、ルイナンツについてのハイデガーの発言の全体を踏まえていないため、暫定的な確認しかできないのであるが、これまで考察したところから、この講義の時期に特徴的な点について最後に簡単に述べることにしよう。

う。まず哲学の本来の主題とされる事實的生のダイナミックな動性が返照、先形成という比喩的表現を用いて解釈されていたが、このカテゴリー構造の理解は、客觀的理論的態度が見誤ってきた（いわば自然的態度に生きる）実存特有の在り方を（分かりやすいといわれるハイデガーの講義の中ではやや晦渋といえる表現によってではあるが、また形式的告知という形でではあるが）見事に描き出しているし、またフッサールの志向性概念とディルタイ的な生の概念のハイデガー流の融合かどのようになされてゆくのかをはっきりと示している点でも興味深いものといえる。また返照、先形成という表現は『存在と時間』ではもはや使用されないとはいえ、非本來的了解や企投、（またもちろん世界への頹落）という実存範疇の原型がこの時期にすでに出来上がっていたことを告げるものである。そこではまた時熟という表現が頻繁に用いられており、すでに動性の諸カテゴリーが、ハイデガー流のカイロス論的時間概念に裏打ちされていることも明らかである。ただしこの講義では、世界に関わる事實的生がおのれ自身を隠蔽していることが明確に述べられており、また本來的という言葉は何度か用いられているものの、まだ本来性と非本来性の緊張関係については、あるいは日常性については表立っての規定はなされていない。新発見草稿のほうでは「**事実性の理念の中には、それぞれ本來的な事実性、文字どおりの意味での自分に固有の事実性、固有の時代や世代の事実性だけが、探求の真の対象であるということが含意されている。墮落への性向ゆえに、事實的な生はたいてい非本來的なところで、つまり伝承されてきたものの中、伝えられてきたもの平均的に自得したものの中を生活している**」（『思想』17頁）とあるように本来性—非本来性の二分法がはっきりと登場するのであり、世界への頹落についても返照、先形成などの概念を用いずコンパクトにまとめられているのである。また今回言及できなかつた無の問題の理解の仕方如何では訂正が必要かもしれないが、新発見草稿では、墮落傾向という「この根本動性を裏付ける最も鋭い証拠は、**事實的な生そのものが死に対して取る態度によって与えられている**」（『思想』13頁）或いは「**確実な死をしかと掴み持つことによって、生がそれ自体において見えてくる**」（『思想』14頁）と述べられているように、死の問題が本來的な在り方との関係で明確に位置づけられているが、講義のほうでは死について直接の言及はなされていない。そうした点では、この講義はまだ『存在と時間』のプロトタイプというには不十分なものかもしれない。とはいえ、動性の動きに焦点を絞る動性についての予持が彫琢されてゆく様を事象に即しつつ描いている点に、やはりこの講義がハイデガーの思想の展開の重要な里程標をなすといえると同時に、この講義の魅力があると思われるのである。

（未完）